

---

# 騎士道

天宮紫苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

騎士道

### 【Nコード】

N8937S

### 【作者名】

天宮紫苑

### 【あらすじ】

平凡を追求し続ける少年はある日平凡とは程遠い突然死を遂げる。死の世界に堕ちた少年は平凡な死を求めて現代に蘇ろうとするが見事に捕まってしまう。罪人となってしまう少年に課せられた任務は一つ。アンドロイドとなつてある少女をヒロインらしく育て上げること。気がつけば騎士学校。よくわからん世界の仕組みとか使命とかに巻き込まれながらも彼は平凡求めて日々全力疾走。誰が主人公だか分からない。さて、誰でしょう？

## 序章（前書き）

残酷な描写があります。また、この物語はフィクションであり、実在する人物及び団体とは一切関係ありません。

## 序章

紅い小さな炎が灯ると同時にふわりと漂う香り。多数の者が良いと申すが自分にとっては悪夢の始まりを意味するもので、到底好きになれそうにもない。しかしそれも今日で終わるのだ。自分自身の手で、終わらせるのだ。

「随分と繁盛しているようではないか。」

「ええ、お蔭様で。」

「気に入らぬな。お前を最初に見つけたのはこのわしであるというのに。」

するりと背中へと回された腕の感触を感じると口元に弧を描いた。

「見つけた時は随分と汚らしかったが、着飾れば…」

低い声に溶け込むように息が乱れている。頬へと手を添えられ舐め回す様な視線を受ける。チリカンが可愛らしい音をたてながら揺れ、暗闇で灼然としている炎によって煌いた。

「旦那、実は一つ御報告が…」

「む？何だ？言うてみる。」

「身請け話が、私に」

「…なんだと？」

明らかに男の様子が変わる。低い声は一層低くなり眉は吊り上がった。肩を掴まれ加減無しに力をこめられる。

「まさか…受けるわけではあるまいな？」

「ふっ…ふふ。嫌ですね旦那。私には旦那だけですよ？」

「くっ、ふ、ははははははは！！当たり前じゃ！それで、誰じゃ？そんなふざけた話をもちかけたのは…」

傲慢な態度は相変わらずに。狂ったように笑ったかと思えば顔の距離を縮ませられ、そう問われた。

「誰でしょうねえ。」

男の脳がその言葉を理解する前に、思考回路はストップしてしまっ

た。しばらくして焼けるような痛みが男を襲う。黒とちっぽけな紅だけが浮かんでいた景色の中に、炎よりも濃いそれが広がっていく。

「汚い手で、触んでくれない？」

引き抜かれてゆく銀色の刃。到底服の中に隠していたとは思えぬ程の大剣であった。何が起こったのか。やっと理解したらしい男は蒼白な顔で怒りを示した。何故だ、と掠れた声。

「やっと解放されるんだ、この生活から。お前みたいな気色悪い男の相手をしなくていいようになるんだよ。大体駄目だよおじさん。そういうことは“女”としなきゃ、ね？日本は将来子供が少なくて困るようになるんだから、さ。あ、でも今から増やしたら逆に高齢化が進むのか？あー、難しい難しい。考えるのやーめた！」

男がとうに事切れていることなどどうでも良いといった様子で淡々と話し続ける“彼”の目には周りなど最早見えてはいない。彼の目が映すものはこの先の未来だけ。先程まで浮かべていた巧笑とは打って変わって狂ったような笑いを高らかにあげていた彼が、氣まぐれかそれとも単に飽きてしまったのかは定かでないがぴたりと止まった。視線がゆっくりと落ちていき、血まみれの男が目に入る。氷より冷たく鋭い眼はまさに獣をイメージさせるものだった。そしてただ一言吐き捨てる。

「堕ちろ」

そして判決は下るのです（前書き）

この物語はフィクションであり、登場する団体・人物などの名称はすべて架空のものです

## そして判決は下るのです

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だああああ！戻りたくない！戻りたくないよ！俺はただ平凡に生きていたかっただけなんだよおお！何でこうなった！？なんか俺が悪いことしたか！？中学で読書感想文の賞とったのが悪かったのか！？平凡な人生歩みたいんだったらほんの少しの間だけでも周りにちやほやされたら駄目なのかよお！それとも何？平凡な俺が体育祭のリレーで一位になったからか！？仕方ないだろうよ！クラスで一番足が速い田中がゴール直前にド派手にすっ転んで、2位だった橋本も巻き込まれてすっ転んで、平凡な真ん中の順位にいた3位の俺が巻き込まれずそのまま普通にゴールしたら必然的に1位になるだろうが！俺だってその後皆からのちよつと冷たいような視線に耐えたんだ！お相子だろうが！つーか俺悪くなくね！ねえ！ねえねえねえ！神様怒ってんの！ねえ！俺はただ平凡に生きて平凡に死にたかっただけなんだ！それが原因不明の突然死って非平凡すぎるだろうが！

少年の声が響き渡る。その手の平は随分と荒れてしまっていて所々に血が滲んでいる。爪は割れてしまっていて痛々しい。此処まで這い上がってこれたんだ。きつと大丈夫。この死者の世界から抜け出して、また現代に戻ってみせる！一步一步、というよりも一手一手というべきか。苦痛に顔を歪めながらも、筋肉が限界だと震えようと、少年は諦めない。平凡への執着。少年の強さはそこにあった。下を見てはいけない。あの魁偉な怪物や馨しい臭いがフラッシュバックしてくる。思い出すだけでも吐き気が込みあがってくる。もう少し、もう少しだ。

「俺は、堕ちたくない！」

そう叫んだ少年は確かに光を掴んだ。

「あれ？」

目を開くとあの地獄のような場所とは程遠い空間に居た。現代の日本でも見られる光景であるが殆どの者が傍観側であろう場所。あのまま平凡に生きていたならばきっと此処に立つことはなかっただろう。ただ空間の構成がそれに似ているというだけで状況までもが同じとは限らないのだが。

裁判。

最初に浮かんだのはそれだった。ちなみに言うと自分は裁判でいう被告人という立場にいるようだ。冷たい視線にぐさりぐさりと挟まれる様な錯覚を起こす。頭痛がしてそつと頭に手を添える。そして気づいた。痛くない、何処も。驚いて手を見ればあれだけぼろぼろになっていた手が綺麗さっぱり元通りになっている。手だけではない。身体の至るところに苦痛を覚えていたというのに何事もなかったかのような。一体何故？というより、なんだこの状況。俺は堕ちずに済んだのだろうか。

「おい」

「は、はい！」



随分と混乱してしまっていたようで突然の呼びかけに声が裏返り身体は飛び上がった。自分へと声をかけた男は深く帽子を被っていて表情は見えない。裁判官だろうか？それにしても態度が悪すぎやしないか？裁判中に煙草？というか、足を上げて椅子にふんぞり返っているのだが。これが裁判だと決まったわけではないが。とりあえずあれだ。第一印象、最悪。

「混乱するっつーのも分かるが、正直めんどくせえからさっさと終わらそうや。」

「は？」

「死者の世界“ヘルヘイム”からの脱出おめでとぅ。お前の感情っつーか、その、平凡への執着心？みてーなのが強すぎて迂闊に近寄れなかった。お前は随分と優秀なエネルギー源らしい。」

「エ、エネルギー源？何を言ってるんですか！？」

「黙れ。被告人は静粛に」

「なっ！」

どうやら俺からの発言は許されないらしい。ほくそ笑むその姿は俺が生きていた頃極悪ドSで有名だった担任教師を連想させる。二度と会いたくない人物である。

「社長、ラタスクから通信が」

「今いいとこだから切っとけ」

「え、いや、しかし」

「俺の言うことが聞けないっつーわけじゃねえよな？」

「喜んで切らせて頂きます」

「よしい子だ。来月から給料倍な」

連想した人物とはどうやら格が違うらしい。性格的にも権力的にもっーか裁判官じゃねえのかよ。なんで社長が裁判紛いなこととしてんだよ。状況は全く理解できないが良くない状況であることは確かだよ。それにしてもラタスクと聞こえたのは聞き間違いか？俺は結構本を読むのが好きで伝説や神話を読みあさった時期があった。うる覚えで確かかどうかは分からないけれど、神話にそんな名前の

栗鼠が登場していた気がする。こんなことを知っていたって今の状況の情報の足しになりやしないけれど。

「簡潔に話そう。お前はこれからアンドロイドになる。」

「簡潔に話すぎだ！全く話が見えん！」

「タメ口とか調子のんなよ罪人が！」

「しゅみません！」

か、格好悪い！心の中で叫んだ。羞恥心から顔に熱が集まってくる。今ならば顔でお茶が沸かせられるかもしれない。そんな気さえする。思い切りかんでしまった。笑ってくれればいいのに至って真面目な雰囲気を出す傍観席の方々。そして原因となった社長はどうでもいい様子で煙草の煙を吐き出していた。

「しょ、詳細を教えていただけると嬉しいです。いきなりアンドロイドって、えっと」

「ちっ」

明らかな舌打ちにまた肩が飛び跳ねた。なんと情けない。

「いいか、お前は死んだ。そして死者が集う世界であるヘルヘイムつつー所から脱出を試みた。だがな、死んだ者が再び生き返ることを望み実行することは大罪なんだよ、分かるか？あ？にしても、あんな高い崖をよくもまあ自力で這い上がったもんだ。もうその時点で平凡なんてもんから離れてんだよお前は。ま、それは今置いといてだな。お前が掴んだ光はお前を拘束するためのものだ。光にエネルギーを注いで固体化させて：まあ専門的な知識はアンドロイドになつてから学べ。簡単に言えばあの光は現代でいう手錠だとか縄だとかそういう類のもんだ。つまりお前は喜んで手錠に手を伸ばしたつつーわけ。とんだマゾだな。そういう趣味でも？」

「ないです！」

「そりや残念。ま、捕まったお前はもちろん大罪を犯してしまった人間として此処に連れてこられた。裁判所みたいだと思っただろ？そう思ってくれていて構わない。大差ねえからな。ただ、この世界の法律は俺だ」

「は？」

「この東堂院隼人様が下す決断に意見も反論もいらねえ。ただ従え」

「ちよ、意味が」

「お前の理解力が乏しいことなんてとくに分かってる。だから安心しろ？お前に課せられる償いの為の任務は実に簡潔で分かりやすい！」

いらつとしたのは気のせいではないはずだ。さっきから散々人を馬鹿にしてくれる。怪訝な顔をすれば愉快そうに笑われた。実に不快だ。

カンカン。

テレビのドラマなんかでしか聞いたことのない裁判の判決の音。苛立ちに混じり緊張が生まれる。一瞬身体中の血液が固まるような、酸欠したかのような。時間が止まったという錯覚と同時にやってくる息苦しさは随分と長く感じられた。

やはりそいつは楽しげに言った。くい、と帽子を指先で上に持ち上げて。

「アンドロイドとなってある女を誰もが認めるヒロインに育て上げる」

ああ、理解不能だ。

## 間違いは誰にでもあるものだ

「メッセージ ジュシンシマシタ」

機械的な音が決められた台詞を並べていく。どうぞと呟けばつらつらと並べられてゆく言葉。どうやら今回はイタリア語のようだ。この前はえらくマニアックな民族の言葉でメッセージを送ってこられたものだったので、解読にかなりの時間を費やしてしまった。よかった、訳せる。ふうつと安堵の息を吐いた時、深い蒼の髪が風に揺れた。目の前にそびえ立つ優美な大聖堂。壮麗なその建物は見るものの全てを魅了してしまいそうである。やはりヨーロッパはいい。ああ好き。本当に好き。純白で美しいこの神聖な場所があと数日で朽廃してしまうなど誰が考えるだろう。美しいもののほど、その末路は凄惨を極めているものだ。幸福へと導く天使の羽でいっぱいになるんだろうな。翼をもがれた天使はまるで神に懇願するように床に這いつくばって、ああ、楽しみだ。一つ言っておこう。天使ほど残酷なものはいない。奴等の幸福と我々の幸福はずれている。人間達とはんだ勘違いをしているんだ。ああ面白い。天使よりも悪魔のほうがずっと素直で可愛いというのに。生き物を見た目で判断するのは良くないことだ。見た目が酷いものほどうまいというではないか。アレだ、アレ。天使は確かに見た目は華奢で好感を持ってしまうのも無理もない。だが見た目とは裏腹に無慈悲な心を持っているのだ。ホステスに貢ぐサラリーマンのように、人間達はそんな天使や神を敬い慕う。実に滑稽だ。阿鼻叫喚な地獄絵図が広がるであろうことを頭に描けば無意識に笑みが零れた。

「レンラク レンラク

トウドウインハヤト

ツウシン ツウシン

ブルルルルル

おっと、今度はメールではなかったようだ。先程連絡をした時は部下のお姉さんが出ただけだ。久々の新人いびりは済んだらしい。全く、自分勝手な男だ。超絶DSで欲に正直。まあ、嫌いじゃないけど。だいつすきだけだ。

「はい」

「おつせえ。とつと出るようせ暇だろ。」

「てめーに言われたくないわあほんだら。」

「うっせえ。で、なんだよ？用件は」

「ああ。実はさっき送った資料に手違いがあつてね。ヘルヘイムから逃げちゃった“源緋”についての。彼の死についての情報がちよつと違ってたみたいで。訂正したかったんだけど、どうやら遅かったようだ。いやいや、すまなんだ。」

「…なに？」

「だから手違い。彼実はヘルヘイムに行くはずじゃなかったみたいで。まあ色々こつた返しててねー。上の連中もちよいとパニックつてんだ。とりあえず事実を隠蔽してくれて頼まれた。まあ遅かったけど」

「おい待て。もうこっちは“あっち”に送っちゃったんだぞ？どうすんだよ」

「面白そうだしいいじゃない。放って置けよ。こっちも忙しいんだ、秘宝探し」

「ま、そういうわけだから頑張れよ、罪人“源緋”」

「だーかーらーああああもうううー！」

理解不能だつて言つてんでしょうが！！何？アンドロイドって！口ポット！？」

「携帯だけど？」

「け、携帯！？」

「そ、携帯」

人差し指を立たせニヤリと笑う裁判官気取りな社長さん、東堂院隼人。彼のたまかな性格は大体分かった。稀に見る行き過ぎた俺様タイプだ。顔によればその性格は許されないという理不尽なものである。多分平凡な容姿の俺がこんな性格を一日でもやってみたなら一発ではぶられる。悔しいけど、こいつなら許されるんだと思う。世の中不公平だ。思わず世間への愚痴を零してしまいたいそうになるが必死で堪え話を進める。

「携帯になるって、貴方頭大丈夫ですか？」

「おい。誰かこいつ縛れ。裁判官に対する暴言だ。即刻打ち首だ」

「す、すみませんでした！ちょっと！貴方達傍観席の人でしょ！なんでこっち来んの！？傍観だけしてるよおおお！」

手の平をだし制止の合図を出した社長さんは「冗談だ」とふつと笑った。腹立つ。

「世界の仕組みとかそういう詳しいことは“学校”で学ぶだろうから此処では言わない。とりあえずお前は一人の女をヒロインらしく

育てればいいだけだ。」

「だからそれが意味わかんね…ごほん。意味がわからないんです！詳しく説明してください！」

「ようは習うより慣れろだ。どうせお前のそのちっぽけな脳みそじや今の状況を把握することで精一杯で、それ以上のことなんか考えられねえだろ。」

「使い方違う！（悪かったな！どうせ今の状況すら把握できてねえよ！）」

ぐつと拳を握り締め下唇を噛んだ。腹立つ腹立つ腹立つ腹立つ腹立つ……っ！怖いから絶対反抗なんかしねえけど！

「てなわけで、

連行〜！！」

またそいつは楽しそうに言い放つ。こっちがどんな気分かなんて知ったこっちゃない。まるで悪魔だ。噂の小悪魔ってやつなのか！？俺が見た小悪魔は雑誌の可愛い女の子が悪魔のコスプレしてゴスロリチックな部屋にいいイタタタタタ！

「いてえよ！」

「拘束します」

「も、もうちょっと優しくしイテテテテっ！」

「ふっ…」

慣れた手付きでくると縄を巻きつけてこれでもかかと力を入れて縛ってくる部下の人は、若干俺をストレス解消機のように扱っていた気がした。

「さ、幕開けだ」

口角を上げて連行されていく彼を見送る。そういえばラタスクから連絡がきていたな、と不意に思い出し最新型の携帯を手にとった。

“源緋”についての情報が間違っていたという衝撃の事実を彼が耳にするのはこのすぐ後のことであった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8937s/>

---

騎士道

2011年10月9日01時02分発行